

# 日本の禅宗における女性観

## —白隠禅師の場合— (3)

竹下 ルッジェリ・アンナ

### はじめに

本論では「日本の禅宗における女性観—白隠禅師の場合— (1)」(『論叢』第九号) 及び「日本の禅宗における女性観—白隠禅師の場合— (2)」(『論叢』第十号) の続きである。前論では白隠慧鶴禅師(1685-1768)の女性観について考察しながら、仏教と禅宗における女性観の背景および禅師の女性弟子の代表であるお察(1)、そして恵昌尼(2)について調べた。今回は、政女および大橋女(出家後に慧林尼)に関わる情報を集め本論を作成した。

前回と同様に、白隠禅師の作品を分析したうえで、このテーマについてすでに論じた論文を参考にした。特にこのテーマを扱った学者は、芳澤勝弘氏と故町田瑞峰氏、常盤義信氏の三名である<sup>(1)</sup>。彼らの論文は白隠禅師の女性弟子たちに関する情報、そして白隠の言葉を理解することにあたって非常に参考になった。

本論は新しく発見された資料を紹介することを目的としておらず、白隠禅師の女性弟子の生涯を通して、白隠自身の女性観を明らかにすることを目指している。従って、以前に書いた論文と同様に、白隠禅師の弟子を紹介してから、禅師の思想・教えについて考察した。

### 白隠禅師の女性弟子についての記録とその資料

白隠禅師の女性弟子については、主に白隠の大高弟東嶺円慈(1721-1792)が著した『白隠和尚年譜<sup>(2)</sup>』(正式名は『龍澤開祖神機独妙禅師年譜』、

1820) および白隠下四世の妙喜宗續 (1774-1848) による『荊棘叢談<sup>(3)</sup>』(1842) に記録されている。後者には白隠門下の尼僧と大姉を合わせて五人の女性が登場する。彼女らは、お察 (阿察婆)、そして原駅の婆、恵昌尼、政女と茶店婆の五人である。『年譜』では、さらに大橋女 (後に慧林尼) について書かれているが、原駅の婆と茶店婆の話は記されていない。『年譜』が口伝されたことは考えられないことから、この二人の消息が晩年のお察と紛淆していると思われる。相国寺の荻野獨園による『近世禅林僧宝伝<sup>(4)</sup>』(明治23年、1890) には、『荊棘叢談』の孫引きのように見えるので、女性五人伝のみ記載され、大橋女について何も書かれていない<sup>(5)</sup>。また森大狂居士が著した『近世禅林言行録<sup>(6)</sup>』(明治35年、1902) にも同様である<sup>(7)</sup>が、同じ森大狂著の『近古禅林叢談<sup>(8)</sup>』(大正8年、1919) には、前記の五人女性<sup>(9)</sup>と共に『年譜』に紹介された大橋女<sup>(10)</sup>の話も見られる。そして、小畠文鼎による『続禅林僧宝伝<sup>(11)</sup>』(昭和13年、1938) に上記の女性弟子が載せられていない。

## 政 女

白隠禅師の女性弟子の中には、杉山政女がいた。政女は比奈村 (現在静岡県富士市比奈町) の人であった。夫の死の後に、一人の子供と暮らしながら、修行を始めた。白隠禅師の『年譜』では1730年、つまり禅師の46歳 (満年齢45) の箇所に来歴されている。

比奈村の杉山氏の寡婦政女は、解脱の勧めによって、実に熱心に参禅していた。時には数日のあいだ身心を忘れるほどであった。その子供は毎日、手習いに行っていたが、子供の食事を用意することさえ忘れるので、隣人が可哀想に思って、政女に代わって食事を与えるのだった。ある日、子供が家に帰って来た。政女は我が子であることも分からずに、「おまえはどこの子じゃ」と。子供が、「この家の子だ。おっ母、何でこんなことを言うんだ」と言うと、政女はウンウンと言って、また三昧に入ってしまう。こんな状態で数日、ついに省発すると

ころがあった。そこで白隠老師に謁して見解を呈した。白隠がいくつかの機縁をもって点検すると、一つも疑滞するところがなかった<sup>(12)</sup>。

政女は「解脱の勧め」（「脱公點發<sup>(13)</sup>」）によって修行に取り組んでいたということであるが、解脱とは無量寺の超宗解脱首座（生没年未詳）のことである。独園元利の弟子に当たり、1715年（正徳5）示寂後に清見寺陽春主諾の元に至り、この年に白隠禪師に入門した僧侶である<sup>(14)</sup>。参禪に励んで政女は、身心を忘れるほどの公案三昧に入り、大疑を起こした。自分のことだけではなく、子供のことさえ忘れるほどの状態であった。社会的な面においては倫理的な問題が生じかねない行動であるが、禪の修行の立場から考えると、このような身心の状態がなければ、公案を透過することができないのである。

白隠禪師も時折引用する曹洞宗の道元禪師の有名な言葉を引例すると、「仏道をならふというふは、自己をならふなり。自己をならふといふは、自己をわするるなり。自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり。万法に証せらるるといふは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり<sup>(15)</sup>。」という心境は政女にも当てはまると思われる。白隠自身は上記の道元禪師の言葉を他の作品にも引用し、例えば『於仁安佐美』巻の下では、「道元禪師が『自己を運んで万法を修証するを迷いとす。万法すすみて自己を修証するは悟りなり』と言ひ『身心脱落、脱落身心』と言われたのも、この三昧のことを言ったものである<sup>(16)</sup>」と述べる。白隠による「此ノ三昧<sup>(17)</sup>」とは「宝鏡三昧」のことであり、「四智」に導く本来の公案の工夫に関する説明の一部である。本論の最後にこの内容について考察した。

政女の体験に基づくもう一つの側面があると思われる。禪に限らず、宗教の世界に入門することであり、安永祖堂老師に次のように説明される。

そもそも宗教にかかわるといことは、とりもなおさず人間世界を超える大きな力にからめとられることに等しい。宗教に生き、宗教に死のうと誓いを立てる者は、肉親との恩愛も自己にたいする愛着も断つ

覚悟を迫られる<sup>(18)</sup>。

その後、安永氏は「ルカの福音書」を引用する。

だれでも、父、母、妻、子、兄弟、姉、妹、さらに自分の命までも捨てて、わたしのもとに来るのでなければ、わたしの弟子となることはできない。

(「ルカによる福音書」十四-二十六<sup>(19)</sup>)

政女は大姉として禪修行を歩んだが、上記のような心境をもったと推測でき、白隠禅師の下で修行の深いところまで至っていたのである。

また『年譜』で、政女の修行に関わるエピソードが語られている。引用すると、次のようである。

ある日、金剛寺の雲山和尚が松蔭寺に来ており、白隠の後ろに寝転んでいた。そこへ政女がやって来て入室を乞うた。雲山がどこかへ行こうとすると、白隠が「かまわん」と言うので、雲山はそのまま平然と寝転んでいた。政女が入って来た。白隠が拶して言う、「夢中の西來の意、作麼生」。政女が見解を呈する。白隠はそこで休した。政女は辞して出て行った。これを見ていた雲山は驚いて起き上がり、「あの女は何のものだ」と。白隠がこれこれしかじかと告げると、雲山は嗟嘆して言った、「あれほど作略が純真で、風も漏らさぬような者は初めて見た」と<sup>(20)</sup>。

この出来事から、興味深い白隠禅師の参禅の様子が伺える。白隠の部屋に横になっていた雲山和尚は、雲山祖泰(1685-1747)のことである。駿州の人で、古月禅材(1667-1751)に参じ、後に永明寺鉄船玄迪の後を継いで金剛寺三世住職となった。白隠禅師と同年であって、幼年時代から親しかったが、62歳(満年齢61歳)の時に示寂した<sup>(21)</sup>。白隠は雲山の頂相に着賛し、その内容は次のようである。

### 仏日雲山和尚

古風な道風、清らかな気宇。

かつて九州の古月和尚に参じて得語したが、

駿河に戻って来て、わが白隠下に参じ、その余蘊を尽くし、向上の玄関を透った。

それ以来、諸方の枯木禅を批判し、

時には、天性の絵筆の才を生かして、近隣の和尚方の頂相を描いたりもした。

私とは幼なじみ、四十年にわたる心交。別れに臨んで、涙があふれてとまらぬ。

その弟子たちが、頂相に賛することを求めて来た。

徳倉普光寺の国禅法均和尚が定中に入って描かれた頂相である。

これに私白隠が睡裏の狂言のごとき言葉を書きつける。

賛を書き終えぬうちに、うとうと居眠り、

夢で雲山和尚と相對して、互いになっこりと笑った。

覚めてみれば、老涙、衣袖に満つ、時に七月二十二日正午<sup>(22)</sup>。

この白隠の頂相の賛から道友の雲山との絆が伺え、白隠の部屋で寝転んでも不思議ではないであろう。その時に入って来た政女が自分の公案の理解を点検するために、『お婆々どの粉引き歌』にも述べられている<sup>(23)</sup>「夢中の西來の意、作麼生」という拶処を与えられ、その答えは驚くほどのものであった。

政女は、白隠禅師に会うために、原の松蔭寺と比奈村の何十キロもの距離を歩き、参禅を求めていたと考えられる。参禅が終わってから、また比奈村に戻り、自宅などで坐禅三昧に入り、公案を拈提し、また参禅のために松蔭寺に行っていたのであろう。残念ながら白隠禅師と政女との出会いについては『年譜』の記録から推測するしかない。禅師が『兎專使稿』で説明する「ただ大勇猛心をもった真の修行者だけが、難透の公案に取り組み、一切の旧見を棄て大疑団を起こして、単々に参究し、そして蛇が竹筒に入ったようになることができよう<sup>(24)</sup>」という根性が政女にあったであ

ろうと思われる。

実は政女についての話は、『年譜』の外に『荊棘叢談』にもあるが、『年譜』の孫引きと見られる。しかし、『年譜』と『荊棘叢談』に注目すべきだと思われる一つの相違点がある。政女に対する雲山の感嘆を表す表現は、『年譜』には「あれほど作略が純真で、風も漏らさぬような者は初めて見た」（「我未見如彼作略純真而不通風者」）であるが、『荊棘叢談』には「女性とはいえ、まことに雲水のはたらきがある」（「彼雖婦女実有衲子作略」）になっている<sup>(25)</sup>。女性である筆者から見れば、この点においては『年譜』と『荊棘叢談』の女性観の違いが感じられ、『荊棘叢談』には当時の女性に対する見方が入っており、『年譜』には白隠とその高弟子である東嶺に、読み取れる修行に対する男女区別のない女性観が見られる。『年譜』と『荊棘叢談』のこのような女性観の違いはお察の伝記にも感じられる<sup>(26)</sup>。

後の禅籍では、上記の政女に対する雲山和尚のコメントは『荊棘叢談』のバージョンになっていて、残念ながら『年譜』の言葉は見られなくなった。

### 大橋女（後に慧林尼）

大橋女（年没年不詳）の本名は「律」で、後に浪人になる江戸の旗本の娘であった。晩年に尼僧になり、白隠禅師に参じた。彼女の来歴は『年譜』に書かれているが、前述したように『荊棘叢談』に記されていない。

大橋女は白隠禅師の時代に有名な人であった。禅師の『年譜』によると、白隠は67歳（満年齢66歳、1751）の時に大橋女に出会った。この出来事に関しては、次のように書かれている。「帰路、平安城に過ぎる。世継氏に館す。池大雅、来たり参ず。及び大橋女を度す<sup>(27)</sup>。」前の年の冬に、白隠禅師は『虚堂録』を講じるために播州明石の竜谷寺におり、そして年明けて備前岡山と井山に行った。その年の四月に、竜谷寺の虚堂録会の際に参じて来た京の豪商の世継政幸とともに京都に戻り、世継の自邸に泊まった。京都に滞在中の際に、上記したように禅師は大橋女にも会った。白隠は京都滞在中、妙心寺の養源院で『碧巖録』を講じたが、おそらく大橋女はこの

法座と他の行事にも参加したのであろう<sup>(28)</sup>。

加藤正俊氏と芳澤勝弘氏が説明するように、一般的に知られている白隠禅師の『年譜』以外に、別に『勅謚神機独妙禅師白隠老和尚年譜』という写本が存在する(京都、法輪寺蔵)<sup>(29)</sup>。この写本は東嶺によって書かれたものであり、その弟子の大観文珠(1766-1842)によって編集された。これは学者たちに『草稿』と呼ばれ、『年譜』より史料として豊かであると思われる。その違いは大橋女の説明にも見られる。もっとも目立つのは名前の違いである。『年譜』では大橋女と記されているが、『草稿』では高橋女になっている。この相違はなぜ生じたか不明であるが、大橋が正しいと思われる<sup>(30)</sup>。

大橋女はどういう人物であったのか。『年譜』と『草稿』の内容を合わせた芳澤氏の現代語訳を見てみよう。

大橋女はもとは江戸に住まいする旗本某甲の娘だった。父は千石余を食んでいたが、何らかの事情あって浪々の身となり、京都にやって来た。収入がないものだから、娘は弟とともに乞食までして家計を助けたが、それでも衣食ともに足らぬ赤貧のありさま。娘は一家を救うため、自分を遊女屋に身売りするよう父母に申し出たが、父母は、わが子を売って生きるなど畜生の業、と許すはずもない。娘はさらに、「これというのも方便、もしお許しにならなければ、一家ともに死ぬだけです。方便は真智には及びませんが、死の難を免れることは道にかなうのですから、これも真智ではありませんか」と説得するので、父母も泣く泣くこれに同意し、遊廓に送ったのである。

女は、もとより教養があり、書も和歌もよくしたので、やがて島原の名妓大橋となった。しかし折りに触れて思うはわが身の上。もとはといえば侍の家に生まれ、深窓に養われ、女中にかしずかれる身であったのに、今はかかるうき川竹の身、何と情けないことか、と。やがてこの煩悶が積もり重なって病となり、医者も手をこまねくほどになった<sup>(31)</sup>。

ここまでの『年譜』および『草稿』の説明から、大橋女はどういう人だったのか明らかになった。望んでもいない生き方を仕方なく歩み、深い実存的な悩みによって心身の病に落ちることに至った。しかし、禪の世界でよく見られるパターンであるが、病に導いたこのような深い悩みと苦しみがあったからこそ彼女が次の次元に入境することができたと見えよう。その後、ある時、名前の不明な貴客が大橋女の悩みと苦しみに気づき、彼女にその病悩から脱け出す方法を教えたという。客は次のように述べた。

「そなたが、我が身と思っておるものは、すべて見聞覚知の四つに他ならない。けれども、この四つのを司る主人というものがあるのだ。これから先、行住坐臥、見るもの何ものぞ、聴くもの何ものぞと、切々に返観して怠らないならば、いずれ本具の仏性が忽然として現前するであろう。そういう境地になれば、苦界を脱することができる」と(32)。

その後、大橋女は教えられたように毎日工夫し、ある時に大事な体験をしたという。『年譜』によると、次のようである。

[...] 延享のころ（一七四四～四七）のある日、狂雷が京の都を襲い、二十八ヶ所に落雷した。大橋は生まれつき雷が嫌いだったので、蚊帳に入り布団をかぶって、左右を小婢従女に護らせて避難していたが、ハタと思うところあって、起き上がると端然と静坐した。やがて狂雷がにわかに庭に落ちた。たちまち大橋は仰顔気絶した。しばらくして蘇ったのだが、何と、見聞するところ、以前とはまったく異なるのである。この不思議な体験を、どなたか明師にお話しして、自分が味わった境地が何なのか証明してもらおうと思っていたが、廊暮らしの身ゆえ、それもかなわず過ぎていた<sup>(33)</sup>。

以上の記述を読むと、大橋女は白隠禅師による「大死」または「大死一番」を体験したと思われるが、遊郭で暮らしていたため、その体験を解明

してもらふことや認めてもらふことができなかった。

これについては、また『草稿』と『年譜』に違いが見られる。『草稿』では大橋女の体験は次のように述べられている。

頻りに震るい地に落つるもの一声、二三間を阻つ。高橋、地に絶す。  
暫くあつて帰覚す。悟、前見に異れり。是より耳根円通を修す<sup>(34)</sup>。

大橋女はまだ遊郭にいたころ、そしてまだ師に導かれていない時にも関わらず、「悟」の体験をしたということである。つまり、『草稿』の著者である東嶺と当然のことながら彼の師匠である白隠禅師は女郎の過去がある女性を受け入れ、まだどの師匠も出会っていないうちに体験した悟りを認めたのである。女性に対して儒教的な「三従」および仏教的な思想である「五障」が一般的であったその時代を考えれば、注目すべきところだと思われる。

白隠禅師が大橋に出会ったとき彼女はすでに遊女をやめていた。『年譜』では次のように述べ続けられている。

そのうちに、ある人に身請けされ、その妻となったが、やがてその夫も歿した。その後、栗原一素居士という者に再嫁した。栗原は大橋に誘われて、いつも白隠禅師に参じたという。大橋は、後に一素居士に乞うて尼となり、慧林と名のつたが、居士に先だつて死んだ。一素居士は白隠禅師の弟子である東嶺に焼香を頼んだ。東嶺が一素居士の家に行ったところ、位牌の代わりに、ただ観音像の軸が掛かっているだけである。東嶺が「位牌はどうしました」と尋ねると、居士は「普門品には応に婦女身得度者、即現婦女身而為説法とあるが、慧林尼こそは観音の応現だ。だから観音像を掛けてあるのだ、何もおかしなことではない」と答えた。東嶺もこれを聞いて黙って香を拈じた<sup>(35)</sup>。

一素居士は鳩摩羅什訳の『妙法蓮華経』(406)の「観世音菩薩普門品第二十五」を引用していた。一般的に「観音経」と呼ばれ、『法華経』の中

では最も新しい部分に当たっている<sup>(36)</sup>。一般民衆における観音信仰の根幹である。この品の内容であるが、無尽意菩薩は仏に向かって、観世音菩薩が何の因縁によって、観世音と名づけるのか。また、観世音菩薩は、どのようにしてこの娑婆世界を巡り、どのようにして人々に教えを示すのかという問いに対し仏は答えの一部として、「長者・家長（居士）・長官・官吏（宰官）・婆羅門の妻の姿によりて救われるべき者には、直ちに妻の姿を現わして一向に法を説き示す<sup>(37)</sup>。」一素居士にとってはまさしくその通りと信じ、出家後に慧林尼になった大橋女のことをそのような菩薩に例えた。『年譜』にあるこのような説明を読むことによって、大橋女後に慧林尼に対する白隠禅師と東嶺禅師の尊敬が読み取れる。さらに、『年譜』に一人に対してこのように詳細な説明は珍しいことから、上記の印象は強まるのである。

『年譜』と『草稿』の違いとしては、大橋女の二代目の夫である栗原一素居士の名前にも見られる。『草稿』で一相になっているようである<sup>(38)</sup>。『年譜』で書かれているように東嶺は大橋女の夫に、彼女のために焼香を頼まれたにもかかわらず、その名を間違っして記した。理由は不明である。

大橋女は遊女になる前の武家の娘としての教養も関係するが、和歌と書画に優れていた。しばしば、日本美術の本に引用され、日本近世絵画史の専門家であるパトリシア・フィスター氏の『世の女性画家たち—美術とジェンダー』で大橋作の『梅図』が載せられている。個人蔵の紙本墨画（93×28.3cm）で、次のような歌が添えられている。

梅のはな  
たか袖ふれし  
にほひぞと  
春やむかしの  
月にとはばや<sup>(39)</sup>

絵には、梅の花が咲いている幹から左上方に向かって伸びる細い枝が描かれている。さらに、紙の右下に描かれている幹と伸びる枝の間の少し上

に薄い墨で掠れかけた筆で描かれた満月も表れる。この画を分析したところでフィスター氏は、狩野派の影響が見られると言う。さらに、「彼女は狩野派の無名のもとで学んだのではなかろうか<sup>(40)</sup>」とフィスター氏は推測する。

大橋女は伴蒿蹊（1733-1806）の『近世畸人伝』（1790）にも記述されている<sup>(41)</sup>。『近世畸人伝』とは江戸時代の多彩な人物百余人の伝記を集めた五巻の伝記集。さらに、『続近世畸人伝』があり、これも五巻で人物百余人の伝記を集めているが、三熊思孝編のものである。収載人物は、文学者、学者、詩人だけではなく武士、商人、職人、農民、僧侶という幅広く社会の階層の人たちが取り上げられ、婢女と遊女まで載せられている。大橋女と共に同じ時期に白隠禅師に参じた池大雅の伝記も記されている<sup>(42)</sup>。『近世畸人伝』の最後の伝記は、白隠禅師の『夜船閑話』（1757）に現れる白幽子のものである。ここでは白隠禅師の名前が記されており、『夜船閑話』の話がまとめられていると見られる<sup>(43)</sup>。

大橋女の『近世畸人伝』による伝記においては、次のように述べられている。

都島原の遊女大橋、実の名は律、もと彼所に大橋といへる名妓あり。うたよみ手書ぬるが、その手ことによければ、大橋やうといひていまに伝はるよし。此妓もその名を嗣るとなん。よろづみやびを好めり。さばかりの女なれば、中々につひのよるべもなかりけらし、尼にならんとおもへるを、老たる母のためいかにとためらふほどに、栗原一素といへるは、世のすねものにて独あるを、よき戯がたきなるべしと人あはせけり。[...] かたみに才をたゝかはしけるが、後に夫婦つれて有馬の湯に浴し、妻はそこにて髪をおろしたり。さて禅にも参じて、白隠和尚京師逗留の日はつねにまうでしに、折々冷泉寂靜入道殿に出あひまらせしかば、和尚、此尼はもと島原の名妓なり、と語られしほどに、入道殿、さらばむかしのなげぶしといへるものを覚えたらん<sup>(44)</sup>。

この伝記で注目すべき点は『年譜』に記されてなかった「老たる母」がいたことと冷泉家の下で歌を勉強していたということである。大橋女の歌は他に残っていると思われるが、これに関しては、町田氏は次のように述べた。

静岡の故秋山寛治氏より、大橋女の歌集が禅文化研究所資料室に所蔵されていると仄聞したので、借覧を申しこんだが、ないとのことである。恐らくはどこかに在ることと思うが、知聞する読者があつたらご教示を仰ぎたい<sup>(45)</sup>。

残念なことであるが、未だにこれについて新たな情報がない。

また芳澤氏は加藤正俊氏が架蔵した大橋女の書蹟を見たという。歌は次のようなものである。

はとのつえといふ事を 句のかしらのつぎの字にを  
きて 松年久といふ事をよみて奉る 恵琳  
とはに懸けて ちとせかそふる この宿の  
まつのさかへの すえそ久しき<sup>(46)</sup>

慧林の名前に関しては、漢字が通仮字によって、混用されてきた。ちなみに、町田氏の論文では、「恵林尼」が使われた<sup>(47)</sup>。また、加藤氏の『白隠和尚年譜』の注にも「恵林尼」となっている<sup>(48)</sup>。

最後に、白隠禅師の和歌集である『藻塩集』を見ると、慧林に関わる歌がある。

慧林いかにや歌よみかけたりけむ岩つゝじの返して  
予がかごにあつらへおこしければ  
春に逢ふ うき世の花と みやま木と  
いざさしよりてあだくらべせん  
岩つゝじ 慧林

人しらぬ みやまのおくの 岩つゝじ  
あだにやさきて あだに散らむ(49)

この歌はいつ作られたか不明であるが、『藻塩集』は宝暦9年(1759)に上梓されたということは序から明らかになっている<sup>(50)</sup>。つまり、白隠禪師が京都で慧林尼に会った8年後のことである。この歌は、慧林尼俗名大橋のための歌かどうかよく分からない<sup>(51)</sup>。

大橋女についてはまだまだ分からないことが多くあるのではないかと思われる。

大橋女の人生をもう一度考えてみると、彼女は武家の娘として生まれて育てられ、高いレベルの教養を受けたにも関わらず、父親が浪人になったせいで京都に移り住み、家族を餓死から救うために京都の遊郭である島原に売られる。家族に対する深い愛情によって生まれた選択であったが、彼女は自己犠牲となるのである。身体は死から免れたが、心は自分の自己認識および元の芸術的な才能と実際の生き方の大きなギャップによって破壊されつつあった。ここで無常を感じ、生きることに希望と意欲がなくなったに違いない。何もできなく縛られているような心の状態から工夫方法を教えられ、この工夫に対する大信心と実践によってある日常的な出来事である落雷で自己の死とその蘇生に至った。禪的に言い換えれば、「大死一番」を体験した。しかし、白隠禪師によれば、この境地で止まってはいけない。修行を続ける必要があり、これは「悟後の修行」という。

大橋女は最初の体験にとどまらず、二度の結婚の後に出家し、慧林になり、修行を続けたのである。そして、人生の最後の時期に白隠禪師に出会って、師に参じてから、『年譜』の説明によれば一年余りで逝去した<sup>(52)</sup>。確かに禪師に出会ってから、接したであろう時期は短いのであるが、なぜこのような禪師が『荊棘叢談』や『近世禪林僧宝伝』、『近世禪林言行録』に記されてないのか疑問に思われる。

## 老若男女を超えた白隠禅師の修行方法

政女と大橋女の伝記から読み取れた、「大疑団」と「大死一番」は白隠禅師による修行過程の重要な点である。禅宗では「大疑」や「疑団」とも呼ばれ、人生そのものに対する大きな疑問の固まりであり、「疑うそのものに成り切って徹底的に疑いを尋究する<sup>(53)</sup>」や「悟境に入る直前の疑いの状態<sup>(54)</sup>」ということである。本来の真剣に修行する姿を示している。直接白隠禅師の説明を引用すると、次のようになる。

どうしたら、その大疑の喜びを味わうことができる。大疑の下に大悟有り、と申しますように、大疑団をおこすことです。今、この文を読んでいる、その主体は何か。日常生活においても、笑ったり悲しんだり、外界の事象にそれぞれ応じて働いていくもの、それはいったい何のものか。これは心か、性か。そのものは青黄赤白の色があるものか。内にあるのか外にあるのか、それとも中間にあるのか、と。その根源を、何としても一回、はっきりと見届けずんば措くまじと、一日中、絶え間なく励み進むならば、いつしか、あれこれ妄想し思う心もなくなり、一切の疑団もなくなり、一念も生ぜず、男もなければ女でもない、賢くもなければ、愚かでもない、生もなければ死でもない、心はひたすらカラリとして、昼夜の分かちもなく、心も身体もともに消え失せたような、そういう心境を、幾度も味わうことができるでしょう<sup>(55)</sup>。

そのような真剣な修行における心境に入ると、疑団そのものもなくなり、「男にあらず女にあらず、賢にあらず愚にあらず、生ある事を見ず、死ある事を見ず<sup>(56)</sup>」、すなわち不平等差別も不差別平等も、心も身体も消えるのである。

その次に、上記の大橋女が体験した「大死一番」とは、「肉体的な死ではなくあらゆるものを捨てきった境地で初めて得られることを言い表したもの<sup>(57)</sup>」というのである。前述したように、「大死」とも呼ばれる。

これについて白隠禅師は『於仁安佐美』巻の下で次のように述べる。

つらつら思うに、参玄の上士は大死一番して、命根を截断するところを経験せねばならぬ。「懸崖に手を撒して、絶後に再び蘇える」というところである<sup>(58)</sup>。

政女と大橋女が体験しているこのような大疑団と大死一番は、白隠禅師の説明では公案の修行に関連しており、その工夫から離すことができない。さらに、この体験に止まらないことが大事であるということを白隠は強調する。『於仁安佐美』巻の下での説明がこのように続く。

このような境地に至ろうとするならば、一気に進んで決して退かないことが肝心要である。往々に、公案に参究じて自己の一大事を究明して、実参の功夫を積み、日常の行ないの中でひそかに仏法の行持を勤めることによって道力が充ちいて来れば、万里も続く幾重にもうち重なった氷の中にいるようで、身心も公案もすっかりなくなり、底のない黒暗坑に墜つたようになることがある。多くの者はたちまち恐怖の心を生じて一步も進むことができず、頭をかきむしって懊悩することであろう<sup>(59)</sup>。

それでもまだ工夫を進まなければならない。

しかし、そこに留まってしまうならば、いつまでたっても大歡喜を得ることはできない。そこは、百尺の竿の先に達した者が、そこから更に一步を踏み出すことによって、十方世界がそのまま我が身の現われであるという境涯になる直前の一瞬の境地なのである。そこに留まっていたはならない<sup>(60)</sup>。

大疑団および大死一番の次に白隠禅師は大歡喜について述べている。白隠は、公案の正念工夫や見性、大悟、さらに悟後の修行など、どの作品に

においても強調し、それらに基づく精神的な過程について説いている。この過程は、大疑と大死、大歓喜の「奥義体験」と定義付けている体験も含んでいるとする。白隠は、こうした体験を非常なる精神の緊張状態までもつていく、公案の絶え間ない工夫における、個人の内的経験の行程として記述している。このような精神の状態を大疑と定義しているのである。習慣的に思い込んでいる事象を疑いに疑い抜き、その限界点まで疑い抜くことが大疑である。そして、この「疑団」とも呼ぶ状態を打破し、心の真理をつかむことは、公案の見解を見つけることと一致するのである。

なぜならば、公案こそが、最初の大疑を生み、最後には大疑を打破するための必要な中心課題なのである。大疑の後に大死があり、大死の後に大歓喜があるといわれる。この三つを白隠禅師は、見性と大悟の教義の支柱として構築した。白隠によれば、見性の体験をするためにも、最初の段階である大疑は絶対に必要である。白隠の功績は、その弟子達に大疑を抱かせることに成功したからである。さらには、見性の深さはそれに先立つ大疑の深さと同等である。白隠にとって公案というものは、知識として学ばれるものではなくて、それによって全身的な疑団を打発し、見性を得る方便なのである。公案は、徹底して疑われなければならない。疑団には、意識的な分別を容れる余地があってはならない。疑団とは、全体的な疑いの塊の意である。それを起こしやすい公案は、最初は「趙州無字」であることを強調していたが、60歳代の半ばになると自分自身が創作した「隻手音声」の公案が最もふさわしいと述べた。白隠の弟子宛ての手紙である多くの作品には、このような修行方法とその必要性を説明し続けるのである。しかし、まだまだここで満足してはいけない。留まる境界ではないという。

公案の修行が進めば進むほど、仏陀の境地を体験し、自分自身は仏陀そのものになるという。白隠禅師の教えの方針と完全性を表す文書は次のようなものであると思われる。これは、特別な人間のための修行方法ではなく、白隠自身の言葉を利用すれば、「僧俗男女ニ限らず、老幼尊鄙に依らず<sup>(61)</sup>」すなわちすべての人間のための修行方法である。

老衲は、三四十年前は、新到が来れば、まず「趙州無字」の公案を

与えていたのだが、どうも、「無字」では効果が少ないように思い、このごろでは「隻手音声」の公案を課している。

隻手の音を聞きとどけたかどうか点検するには、いくつかの雑則がある。[…] これらのすべてが、掌上を見るごとくはつきりしたときに、初めて、大円鏡智を得たことを認める。しかるのちに今度は、一切の音声を止めさせる。鳥獸、笛の声、鐘鼓の響きを止めよ、と。あるいは、「沖ゆく帆かけ舟を止めて見よ」とこれらのすべてが透過したときに、宝鏡三昧に入ることができる。これを諸法実相の觀ともいう。つまり、洞山五位の偏正三昧に同じである。見る我もなければ、見られる物もない、差別即平等、平等即差別であり、(臨済のいう)「途中に在って家舎を離れず、家舎を離れて途中に在らず」というところである。この境地に至るならば、平等性智を得たことになる。

しかし、この平等というところに安住するならば、狐や狸が巢穴に閉じこもって睡るようなことになってしまう。[…] それから、正受老人がされたように、いくつかの古則公案を出す。[…] これらを一々透過して初めて、妙觀察智を得ることができるのである。

(これで終わりではない) さらに精神を激発して、(あらゆる法門、仏教ばかりでなく広く外典までも学び) 広く法財を集め、(これをわがものとして) 法を説いてゆかねばならない。大法施を行ずることによって、あまねくいっさいの衆生を利益し救済し、「上求菩提、下化衆生」を実践してゆくのだ。まことに貴ぶべきは、この「上求菩提、下化衆生」である。これを未来永劫にわたって倦まずたゆまず実践してゆく。この大いなるはたらきは、応ぜざることなく、到らざるところがない。この大いなるはたらきをするものを成所作智というのである。喜ばしいではないか、かくして四智(大円鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智)がそなわったのである。そして、この四智が円明になれば、ついに常樂我淨の四徳が具足するのである。それを大乘円頓の菩薩行という。それがまた愚堂国師の家風である<sup>(62)</sup>。

『宝鑑貽照』による長い引用であるが、これは白隠禅師の根本的な教え

だと思われる。それだけではなく、白隠自身は自分の家風のやり方だという。さらに、上記の『於仁安佐美』巻の下の説明はほぼ同じ内容である。他の作品にもしばしば表れる。

白隠禅師による修行方法は、大悟の根本である大疑団、大死一番、大歎疑の体験を得るには「趙州無字」や「隻手音声」が必要であるが、そこで終わることなく、多くの古則公案と拶処を透過することによって、修行が深まり、最終的に『坐禅和讃』で言われている四智の円明まで至るべきである。

女性の問題に関わる平等と差別の相互関係を理解するには、四智と洞山五位の理解は欠かせないところである。筆者はすでにこの二つのテーマと白隠の関わりということについて論文を書いた<sup>(63)</sup>ので、ここでは省略するが、改めて四智と五位の同等に注目したい。

白隠禅師の女性観について常盤氏は、白隠自身の『無門関』第四一則である「女子出定」の理解が大事と述べる<sup>(64)</sup>。今回これについて論じるための余裕がないので、常盤氏の論文を参考にして頂きたい。しかし、この公案は女性観および差別と平等との関連について重要だと思われる。

山田無文老師は、この「女子出定」について『無門関』の提唱には、上記の引用の内容である四智のことを述べる。白隠の説明をより理解するには、役に立つと思われるので、引用する。

坐禅和讃に、「四智円明の月さえん」とあるが、仏の智慧には四つの面があると言うのである。第一が大円鏡智、大きな円い鏡のような智慧である。これが根本智である。鏡の中には、なんにもないから、富士山も入れば、太平洋も入る。太陽も月も何千万の星も入る。何もかも入る。なぜ入るかと言えば、無だからである。われわれの心も鏡のごとく無だから、全宇宙がすべて入る。これを大円鏡智と名づける。

その鏡のような清浄無垢な心の前には、すべてが平等である。鏡の前には、富士山が大きくもなければ、石ころが小さくもない。金持ちも貧乏人も、大臣も乞食も、鏡の前には同じく現象にすぎない。すべて平等である。このすべてを平等に見ていく智慧を、平等性智と言う。

すべてを平等に受けいられるけれども、映る姿はそれぞれ、山は山、川は川、男は男、女は女で、決して混同されることはない。はつきり違わなくてはならん。このはつきり判断を下す智慧を妙観察智と言う。妙に観察する智慧である。しかも、眼はものを見、耳は声を聞き、鼻は匂いを嗅ぎ、舌はものを味わい、身体はものに触れて初めて差別の判断が下されるので、その五感のはたらきを成所作智と名づける。所作を成す智慧である。

この四つの智慧が、人間には誰にも本来そなわっておる。悟りを開けば、この四つの智慧が円明に自由にはたらくことになる<sup>(65)</sup>。

白隠禅師の女性弟子のように当時の禅の道を歩んでいた女性たちの気持ちを表すことができるものとして、最後に、同じ時代に生きていた女性禅者であった飯塚染子（1667-1705）の『無門関』第四一則の解釈に書かれた和歌を引用したい。

そのかみの契りし儘を標にて法の道芝踏みも迷はず

昔、お釈迦様は、人生に苦悩する衆生を救おうと、お誓いになった。

かく言うわたくしも、その昔、禅の道によって救われたいと願った。

その時の誓いと決意は、お釈迦様とわたくしとの「默契」のようなものである。

だから、女性である自分は悟り得ないなどと一切迷うことなく、この禅の道をひたすら歩き続けよう。

わたくしは女性であると同時に、「人間」でもあるのだから<sup>(66)</sup>。

## 最後に

本論では政女と大橋女という白隠禅師の女性弟子について調べた。以前に述べたお察と恵昌尼と共に四人にのぼる。しかし、白隠禅師の『年譜』

に記されていない他の女性弟子が存在していたと思われるので、白隠禅師の女性弟子について今後も研究を続ける予定である。

## 注

- (1) 特に次の論文が参考になった。町田瑞峰「白隠門下の女性禅者の消息」、『禅文化』第103号、1982年、77-89頁；町田瑞峰「白隠門下の女性禅者の消息—遊女大橋・信州伊那の三才女（さん女・清女・亀女）」、『禅文化』第105号、1982年、127-141頁；常盤義伸「白隠と女性」、『日本仏教学会年報』第56号、1990、153-166頁；常盤義伸「禅の女性観」、『仏教』第15号、1991、219-226頁；芳澤勝弘「白隠禅師仮名法語・余談（五）—お多福美人のこと—」、『禅文化』第167号、1998年冬、132-139頁；芳澤勝弘「白隠禅師仮名法語・余談（六）—遊女大橋こと慧林尼—」、『禅文化』第168号、1998年春、132-141頁。筆者は常盤義信氏から上記の自分の論文を送って頂いたこと、芳澤勝弘氏に多くのアドバイスとヒントを頂いたことに感謝を申し上げる。それに加えて、白隠の生涯に関わる情報を得るには、白隠伝の代表研究者である陸川堆雲氏の『白隠和尚詳伝』および秋山寛治氏の『沙門白隠』も欠かせない参考書であった。陸川堆雲『考証白隠和尚詳伝』山喜房仏書林、1963年。秋山寛治『沙門白隠』、秋山愛子、1983年。
- (2) 『白隠和尚全集』第一巻、龍吟社、1967年（初版発行1934年）、1-78頁。加藤正俊『白隠和尚年譜』、思文閣出版、1985年。芳澤勝弘編著『新編・白隠禅師年譜』、禅文化研究所、2016年。
- (3) 『白隠和尚全集』第一巻、105-148頁。能仁晃道編『白隠門下逸話選—荊棘叢談全訳注』、禅文化、2000年。
- (4) 荻野獨園『近世禅林僧寶傳』上・中・下巻、貝葉書院、1889年。能仁晃道訓注『訓読・近世禅林僧宝伝』全二巻、禅文化研究所、2002年。
- (5) 能仁晃道訓注『訓読・近世禅林僧宝伝』上巻、223-226頁。
- (6) 森大狂（慶造）『近世禅林言行録』、金港堂書、1902年。森大狂（慶造）『近世禅林言行録』、日本図書センター、1977年。
- (7) 森大狂（慶造）『近世禅林言行録』、197頁、208-213頁。
- (8) 森大狂『近古禅林叢談』、藏経書院、1919年。森大狂『近古禅林叢談』、禅文化研究所、1986年。
- (9) 同上、350-356頁。
- (10) 同上、352-354頁。

- (11) 小島文鼎『続禅林僧宝伝』八冊、貝葉書院、1938年。その内容は『訓読・近世禅林僧宝伝』にも含まれている。
- (12) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禅師年譜』、178-179頁。原文は次の通りである。「比奈邑杉山氏寡婦名政。依脱公點發。參禪尤切。至忘身心。有兒日往。順朱墳墨。午時遺炊爨。兒還無飯。鄰人愍食之。一日兒還。政問曰。子。誰家兒。兒曰。阿娘何言乎。政肯諾復入三昧。如是數日而有省。便謁師呈所見。師以數段機緣詰之。一無凝滯。」『白隠和尚全集』第一卷、46-47頁。また、加藤正俊『白隠和尚年譜』、184頁。
- (13) 原文である。『白隠和尚全集』第一卷、46頁。また、加藤正俊『白隠和尚年譜』、184頁。
- (14) 加藤正俊『白隠和尚年譜』、166-167頁。
- (15) 『道元禅師全集』第一卷、春秋社、1991年、3頁。
- (16) 芳澤勝弘訳注『白隠禅師法語全集』第二冊、禅文化研究所、1999年、97頁。原文は次の通りである。「永平開祖ノ、自己ヲ運ンデ、萬法ヲ證スルハ迷イナリ、萬法來シテ自己ヲ證スルハ悟リナリ、身心脱落、々々身心、ト説カレタルモ、此ノ三昧ノ大略ヲ云ヘリ。」同上、301-302頁。時折、白隠による道元禅師の引用として、他には『於仁安佐美』巻の上を挙げられる。「道元禅師は『行持有らん一日は貴ぶべきの一日なり、行持なからん百年は恨むべきの百年なり』と言われたが、行持とは何か。それは上求菩提、下化衆生の方便に他ならないのです。」同上、44頁。原文は、202頁。内容から判断すると、白隠は道元の教えを尊敬し、さらに深く理解していたということが分かる。
- (17) 同上、302頁。
- (18) 安永祖堂『笑う禅僧一「公案」と悟り一』、講談社、2010年、96頁。
- (19) 同上。また、『聖書』、日本聖書協会、2000年、137頁、を参照。
- (20) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禅師年譜』、179頁。原文は次の通りである。「一日。雲山在師後偃臥。政來乞入室。山將避。師曰。母起。山臥自若。政人來。師拶曰。夢中西來意作麼生。政呈所見。師便休。政辭去。山問曰。適來是誰誰。師以實告。山嘆曰。我未見如彼作略純眞而不通風者。」『白隠和尚全集』第一卷、47頁。また、加藤正俊『白隠和尚年譜』、184頁。
- (21) 加藤正俊『白隠和尚年譜』、164頁。
- (22) 芳澤勝弘訳注『荊叢毒蕊』坤、禅文化研究所、2015年、277-278頁。原文は次の通りである。「佛日雲山和尚 道標高古、氣宇清閑。西航海撞著 古月黒光、擊碎佛心印。東還家透脱玄沙道底、拗折法窟牙。從是惱害諸

- 方枯木裏禪徒、或時描貌近鄰曲景上諸老、心交四十歳、別涙千萬行。其徒一兩肩、來請題畫像。眞是普光堂頭定中遊戲、贊印沙羅樹下睡裏狂言。贊語未成先春睡、夢中相對笑顏親。覺來老淚滿衣袖、七月廿二當午時。」同上、276頁。また、『白隱和尚全集』第二卷、245頁。
- (23) 芳澤勝弘訳注『白隱禪師法語全集』第十三冊、35頁。『白隱和尚全集』第六卷、236頁。
- (24) 芳澤勝弘訳注『白隱禪師法語全集』第十二冊、230頁。原文は次の通りである。「特（獨）り大勇猛の上土有て、一則難透の狼毒語を執て舊見を放下し、大疑團を起して、單々に參究して生蛇竹筒に入るか如くし。」同上、303頁。また、『白隱和尚全集』第六卷、146頁。
- (25) 能仁晃道編『白隱門下逸話選一荊棘叢談全訳注』、107頁。原文は同左、260頁。『近世禪林僧宝伝』のような後の書物には、『荊棘叢談』の伝記がほぼそのまま載せられているので、最後の文書は『荊棘叢談』の文章と同じである。能仁晃道訳注『訓読・近世禪林僧宝伝』上巻、224頁。森大狂（慶造）『近世禪林言行録』、213頁。森大狂『近古禪林叢談』、354頁。
- (26) これについて、竹下 ルッジェリ・アンナ「日本の禪宗における女性観—白隱禪師の場合—（1）」、『花園大学国際禅学研究所論叢』第九号、2014年3月、56頁。
- (27) 芳澤勝弘編著『新編・白隱禪師年譜』、330頁。原文は次の通りである。「歸路過平安城館世繼氏。池大雅來參。及度大橋女。』『白隱和尚全集』第一卷、60頁。加藤正俊『白隱和尚年譜』、233頁。
- (28) 芳澤勝弘編著『新編・白隱禪師年譜』、330-331頁。
- (29) 加藤正俊『白隱和尚年譜』、3-4頁。芳澤勝弘編著『新編・白隱禪師年譜』、xix頁。
- (30) 芳澤勝弘「白隱禪師假名法語・余談（六）一遊女大橋こと慧林尼一」、134頁。芳澤勝弘編著『新編・白隱禪師年譜』、331頁。
- (31) 『年譜』に関する原文は次の通りである。「本貫者江府公臣。某甲女。而食千石餘。父因事爲浪士。與其小弟俱寄食每家。終婣且貧。女教父母曰。贖我娼家。得時相遇。父母曰。估子自活。是畜生業也。設死不爲。女曰。是方便也。君如不爲。應當入死地。雖方便不及眞智。去難入道。亦非眞智耶。父母同之。遂送倡家。善書好和歌。待遇惟勤矣。女嘗思惟。我舊生官。養帷帳之内。使令婢子。而今墮這隊。是什麼狀。日往月來。思念漸積而感沈痾。醫亦至拱手。』『白隱和尚全集』第一卷、60-61頁。加藤正俊『白隱和尚年譜』、233頁。

- (32) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』、332-333頁。『年譜』に関する原文は次の通りである。「汝一身除見聞覺知。別無作底者。四者有主。汝行住坐臥。見者何物。聽者何物。切切返觀不怠則。本具佛性。忽然現前。到這箇田地。是便解脫苦界要徑也。』『白隠和尚全集』第一卷、61頁。加藤正俊『白隠和尚年譜』、233頁。
- (33) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』、333頁。『年譜』に関する原文は次の通りである。「女謹稟命。單單潛修。延享間。狂雷震洛地。一日隕二十八所。女素忌雷。垂帳被衾。令小婢從女護左右。忽猛省堅坐。雷聲遽震。撲然墮庭中。大橋仰顛絕氣息。少焉蘇。見聞幾乎異平常。雖欲得師證。欲染境中未由也耳。』『白隠和尚全集』第一卷、61頁。加藤正俊『白隠和尚年譜』、233頁。
- (34) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』、610頁。
- (35) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』、331-333頁。
- (36) 観音経事典編纂委員会編『観音経読み解き事典』、柏書房、2000年、252頁。
- (37) 金森天章訓読『法華経』、東方出版、1985年、424頁。原文は、『大正新脩大藏経』巻9、大正新脩大藏経刊行会、昭和48年、57頁b。
- (38) 芳澤勝弘「白隠禪師仮名法語・余談（六）一遊女大橋こと慧林尼一」、134頁。また、芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』、610頁。
- (39) パトリシア・フィスター『世の女性画家たち—美術とジェンダー』、思文閣出版、1994年、130頁。
- (40) 同上。
- (41) 伴蒿蹊『近世畸人伝』、岩波書店、2015年（第18刷発行）、73-75頁。
- (42) 同上、157-162頁。
- (43) 同上、238-242頁。
- (44) 同上、73-75頁。
- (45) 町田瑞峰「白隠門下の女性禅者の消息—遊女大橋・信州伊那の三才女（さん女・清女・亀女）」、127頁。
- (46) 芳澤勝弘「白隠禪師仮名法語・余談（六）一遊女大橋こと慧林尼一」、139頁。解説については、同上、139-140頁。また、芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』、336-337頁、を参照。
- (47) 町田瑞峰「白隠門下の女性禅者の消息—遊女大橋・信州伊那の三才女（さん女・清女・亀女）」、130-131頁。
- (48) 加藤正俊『白隠和尚年譜』、237頁。
- (49) 『白隠禪師法語全集』第十三冊、333-334頁。『白隠和尚全集』第六巻、

- 340頁。
- (50) 『白隠禅師法語全集』第十三冊、319-320頁。『白隠和尚全集』第六卷、333-334頁。
- (51) これについて、芳澤勝弘「白隠禅師仮名法語・余談（六）—遊女大橋こと慧林尼—」、140-141頁を参照。
- (52) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禅師年譜』、336頁。
- (53) 『禅学大辞典』、大修館書店、789-b頁。
- (54) 同上。
- (55) 『白隠禅師法語全集』第十二冊、5頁。原文は次の通りである。「蓋し彼の因地下の歡喜は如何して得べきぞとならば、大疑の下に大悟ありと申して、唯今、此文を披賢し、或は笑ひ或は談論し、萬縁に應じて、夫れへに働きもて行く底、是れ何物ぞ、是れ心なりや、是性なりや、青黄赤白なりや、内外中間に在りやと、是非々々一回分明に見届けずば置くまじきぞと、十二時辰三 [の] 四威儀、たけく精彩をつけ、間もなく勵み進み侍らば、いつしか妄想思量の堺を打越へ、前後際斷（底）の工夫現前して、男にあらず女にあらず、賢にあらず愚にあらず、生ある事を見ず、死ある事を見ず、唯一向、（心上）、空洞々地虚潤々地にして、書夜の分ちを見ず、心身ともに消へ失する心地は幾たびも有之事に候。」同上、36-37頁。『白隠和尚全集』第五卷、320-321頁。
- (56) 原文である。『白隠禅師法語全集』第十二冊、36頁。
- (57) 『禅学大辞典』、大修館書店、795-b頁。
- (58) 『白隠禅師法語全集』第二冊、87頁。原文は次の通りである。「熟へ顧フニ、參玄ノ上士ハ大死一番、命根斷底ノ時節ヲウルヲ以テ貴シトス。是レヲ天涯ニ手ヲ撒シテ、絶後ニ再ビ蘇ヘル底ノ時節ト云フ。」同上、284頁。
- (59) 同上、88頁。原文は次の通りである。「此ノ寶處ニ到ラント欲セバ、一氣ニ進ンデ退カザルヲ至要トス。往々ニ話頭ヲ參究シ、自己ヲ究明して、寶參功積モリ、潛行カラ充ツル則ンバ、萬里ノ層水裏ニ在ルガ如ク、身心モ話頭モ、一時ニ打失シテ、無底ノ黑暗坑に墮イルガ如クナル時、多クハ乍チ恐怖ノ心ヲ生ジテ、一步モ正ニ進ム事得ズ、頭ヲ搔イテ懊惱ス。」同上、284-285頁。
- (60) 同上。原文は次の通りである。「若シ果シテ然ラバ、縦イ無量劫數ヲ歴ルトモ、歡喜ノ眉ヲ開ク事能ワジ。殊ニ知らズ、是レハ斯レ百尺ノ竿頭ニ一步ヲ進メテ、十方刹土ニ全身ヲ現ズル底ノ刹那ナル事ヲ。」同上、285頁。

- (61) 同上、288頁。
- (62) 芳澤勝弘訳注『荊叢毒蕊』坤、1143-1145頁。原文は次の通りである。  
「山野三四十年前。勸人參趙州無字。中謂無字出人難。參到死不得力多。近勸令聞隻手聲。到聞隻手有穿鑿。[…] 如上如見掌上時。始許得大圓鏡光。而教一切音聲止。鳥獸簫笛鐘鼓響。或令遠浦歸帆止。如上逐一透過後。却入彼寶鏡三昧。或名諸法實相觀。同五位偏正三昧。全無能見無所見。今時那邊總一般。途中家舍無隔礙。此觀若人得成就。即是平等性智人。若住著平等寶處。恰似狐狸睡舊窠。[…] 自是疑數段因緣。如最初正受授與。[…] 從頭一一透過後。始許得妙觀察智。於此轉激發精神。廣聚法財行法施。普利濟多少羣生。修上求下化正因。可貴彼上求下化。涉塵點劫不倦怠。大機圓應妙無方。名之爲成所作智。歡喜四智漸具足。須期四智圓明時。終是得四德具足。此是圓頓菩薩行。又是國師舊家風。」  
同上、1141-1142頁。または、『白隱和尚全集』第一卷、261-262頁。
- (63) 竹下 ルッジェリ・アンナ「白隱の唯識観—『四智辨』を通して—」、『花園大学国際禅学研究所論叢』第二号、2007年、151-179頁。アンナ・ルッジェリ「白隱禅師における洞上五位の一考察」、『花園大学禅学研究』第79号、2000年、199-221頁。アンナ・ルッジェリ「白隱と現代の公案の問題—『十牛図』および『洞山五位』を通して—」、大阪府立大学大学院『人間文化学研究集録』第10号、2000年、59-69頁。
- (64) 常盤義伸「白隱と女性」、157-158頁。常盤義伸「禅の女性観」、224-225頁。
- (65) 山田無文『無文全集』第五卷、禅文化研究所、平成16年、677頁。
- (66) 島内景二『心訳「鳥の空音」—元禄の女性思想家、飯塚染子、禅に挑む』、笠間書院、2013年、248-249頁。

